

# 自分の考えを文法的な間違いを恐れずに表現することのできる生徒の育成

—ICTを活用した、継続的な新出文法を身に付けるための取り組みを通して—

教科指導重点コース 言語・社会科学系  
早川幸希

## I 主題設定の理由

### 1 今日の教育課題

#### (1) 中学生の表現活動に対する意識

文部科学省(2014a)は、中学2年生の生徒と英語科教員を対象にして小学校外国語活動実施状況調査を行っている。その中で、外国語活動導入後に外国語活動で学んだ中学校2年生は、「自分の意見や考えを書く・話すことができている」と考えている割合が低く、また、中学校の英語の授業で「エッセイなど、ある程度まとまりのある文章を書くこと」や「自分の意見や考え、感想などを英語で発表すること」をしてみたいと回答した生徒が10%程度であったことを示している。そして、中学校外国語科担当教員の指導状況が以下のようであったことを示している。

言語活動	よく行う	時々行う
ライティング	8.3%	57.7%
スピーチ	3.9%	52.7%
ディベート、ディスカッション	0.6%	4.1%

この結果から、生徒は英語で書くことや話すことに対して十分な活動経験がなく、苦手意識をもっており、それらの活動に対して消極的な態度を示していると言える。

#### (2) 今後の英語教育に求められる言語活動

社会の急速なグローバル化の進展の中では、生涯の様々な場面で、外国語、特に英語によるコミュニケーション能力が必要となることが想定されている(文部科学省, 2014b)。そのため、書いたり話したりすることによって自分の考えを表現することは、他者との関わりの際に必要となる能力であり、英語教育において育成すべき能力である。

文部科学省(2016)では、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義している。コミュニケーション能力は、話す・聞く・書く・読むといった言語活動のほか、非言語による伝達手段(イメージ、音、身体)も含めた広範な活動に関わるものであるとされており、書いたり話したりすることによって自分の考えを表現することは、他者との関わりの際に必要となる能力であると考えられる。

また、文部科学省(2014b)では、英語教育の在り方に関する有識者会議において、コミュニケーション能力を身に付けさせるためには、中学校において、主体的に「話す」「書く」などを通じて互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開することが重要であると提言された。また、学習の過程では、発音、語彙及び表現、文法等を間違えることはあり得ることであり、そうした失敗を恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することが重要であると示されている。

#### (3) 個別最適な学びと協働的な学び

令和3年の中央教育審議会において、2020年代を通じて実践すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「個別最適な学び」と「協働的な学び」が提言された。

「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」からなるとしている。「指導の個別化」とは、基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現したり、特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行ったりすることを示す。また、「学習の個性化」とは、基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整することを示す。

これらの「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要であるとしている。

## 2 生徒の実態

実践校の、英語学習における生徒の様子を見ると、自己表現をすること、特に自分の意見や考えを書くことを苦手とする姿が見られた。教科書に示されているテーマに沿って新出文法を用いて自己表現をする活動では、新出文法を正しく用いて表現することができる生徒がいる一方で、全く自己表現ができない生徒や、タブレットの翻訳機能を使って英文を書いている生徒もいた。おそらく生徒たちは、自分が言いたいことは

あるが、語彙や表現がうまく身に付いていなかったり、間違えること恐れたりするため、自己表現に消極的であったのではないかとと思われる。

また、授業内で、新出文法の復習として、板書された英作文の問題に取り組んでいた際、英語の学習が苦手な生徒は、自分で問題に取り組まずに答え合わせを待っていた。こういった生徒の中には、問題集にある空所補充や選択問題には取り組んでいたようであった。

### 3 目指す生徒の姿

本実践研究では、以下のような生徒を育成することを目指すこととする。

自分の考えを文法的な間違いを恐れずに表現することのできる生徒

自分の考えを表現する場面としては、単元末のパフォーマンス課題だけではなく、単元の途中にも「話す」「書く」両方の活動を設定し、その活動に取り組ませていく。生徒には発音、語彙及び表現、文法等の間違いをしてもよいことを伝え、何回も「話す」「書く」経験をさせることで、間違いを恐れずに表現することができるようになってもらいたい。

また、語彙及び表現や文法を学習する際には、多くの例文に触れさせたり、生徒一人一人の学習の進度に応じた学びをさせたりする。そうすることで、それらを活かして自己表現をすることができるようにしたい。

## II 先行研究のまとめ

ここでは、新出文法を自己表現に結び付けるための先行研究や教育実践例を調べ、まとめていく。

### 1 ICTの活用に関する先行実践

財団法人日本視聴覚教育協会が2012年度にまとめた、平成23年度文部科学省委託「国内のICT教育活用好事例の収集・普及・促進に関する調査研究事業」による実践例を2例挙げる。

1つ目の事例は、岡山県の中学校で行われた実践であり、電子黒板でデジタル教科書やプレゼンテーションスライドを活用することによって、単語や文法事項の反復も効率よく行うことができたと述べられている。そして、電子黒板を活用することで、生徒の興味を惹き、新出構文についての理解もスムーズであったとまとめられている。

2つ目の事例は、北海道の小学校で行われた実践であり、電子黒板などのICT機器を用いることによって、テンポよく言語活動を展開することが可能となり、児童が学習活動に意欲的に取り組むことができたとして述べられている。

### 2 自己表現に関する先行実践

中島(2012)は、生徒がその日に習った表現を用いて自己表現活動をする利点として、表現や文法事項を自分のものにしようとする意識が働くようになることと述べている。また、その日に習った表現と自分に関することをつなげることによって、習った表現を用いて「表

現したい」という思いを持つことにつながるとしている。その結果、生徒から、自己表現を通じて、単語や文法の勉強になったという反応が見られたとしている。

### 3 形式と意味のバランスを重視した先行実践

松尾(2018)は、場面や状況に合わせて自分の意見・考え・思いを伝える力を育成するために、新出文法について形式重視の指導と意味重視の指導をバランスよく取り入れたり、生徒の生活場面に即した課題を設定したりした。その結果、生徒が英語を使って自分の意見や考えを伝えたいと思うようになったと述べている。

彼の実践は2時限完了の実践であり、その内容としては、1時限目に新出文法の確認と練習問題を行い、2時限目には新出事項の復習、本文内容の確認、そしてメインの言語活動としてのペアで会話を考える活動を実施するというものであった。ペアでの活動の際は、自分の意見・考え・思いを必ず入れるように指示をすることで、生徒同士で活発な会話をしながら、表現する文章を自分の実生活につなげようとして取り組む様子が見られたとしている。

松尾はこの実践の課題として、以下の2点を挙げている。まず、生徒の意見を学級全体で共有する時間を設けることである。そうすることで、生徒の考えの幅を広げ、自らの生活に置き換えさせる必要があったと考えている。もう1つが、生徒の文法的な誤りを修正する時間を多くとることである。教師のフィードバックや訂正によって、自分の意見や考えを他者に正確に伝えるための文法の正確性を高めさせたり、不安を軽減させたりすることができたのではないかと考えている。

### 4 能力別学習についての先行研究

長谷川、安藤(2017)では、小学校5年生を対象にデジタル英語教材を使用した個別学習を取り入れた実践を行った結果、下位群の児童についてリスニング力の成績が、実践前と比較して有意な差となるまで向上したとしている。学習形態としては、パソコンを使ってインターネットから教材をダウンロードし、自分のペースで学習するというものであった。

また、英語の実践ではないが、山口県美祢市教育委員会(2022)は小学校6年生の算数科の授業において、オンライン学習教材Qubenaを授業内に取り入れた実践を紹介している。児童が自分の課題に応じて自分で教材を選び学習を進める「自由進度学習」を実施した結果、児童の学習意欲を高めることができたり、既習事項で理解できないことを復習することができたりしたという成果があったと述べている。

## III 研究構想と実践デザイン

### 1 研究目標

本実践研究では、以下の2点を目標とする。

a) 中学校英語科における、「自分の考えを文法的な間違いを恐れずに表現することのできる生徒」を育成するための、ICTを活用した授業の有効性を検証する。

b) ICT の授業内外における活用について、その利点と課題を生徒の意見から見出す。

## 2 研究仮説

研究目標 a) について、以下のような仮説を設定し、検証を行うこととする。

ICT 機器を以下のように活用することによって、新出文法について、その意味、形式、使用場面を理解することができる。

ア) 新出文法が用いられる場面をイラストで示した、多数のプレゼンテーションスライドの提示

イ) 生徒の理解度に応じた復習問題の提示

生徒が文法的な間違いを恐れなくなるようになるためには、新出文法の意味や形式を十分に理解できているだけではなく、その場面を適切に理解している必要がある。実践校では、新出文法について、教科書の基本文の説明を板書で行い、口頭での置き換え練習をした後、教科書の練習問題に取り組みさせていた。定着のための練習の回数を増やすことと、言語の使用場面を想起しやすくすることを目的として、ア) の手立てを取り入れようと考えた。

また、新出文法の復習場面では、全員が同じ和文英訳問題に取り組んでいたため、英語を苦手とする生徒にとっては難易度が高い活動になっていた。そのため、イ) の手立てを取り入れようと考えた。

なお、「自分の考えを表現する」場面の設定は、目指す生徒の姿でもあることから重要である。ここでは、自己表現をする機会を単元の中で継続的に設定していくこととする。

研究目標 b) に関しては、仮説を設定せず、生徒の意見を基に考察することとする。

## 3 研究の手立て

### 【手立て 1：プレゼンテーションスライドを活用した文法の導入と復習】

#### ① 目的

基本文の説明を、板書ではなくプレゼンテーション機能を用いて行うことにより、意味と形式の理解と、記憶への定着を促進させる。

#### ② 内容

プレゼンテーションスライドを用いて、新出文法の意味と形式を説明した教材を作成する（教材 1）。また、その新出文法が使用される場面のイラストとその場面を表す英文を 1 枚のスライドに収めた教材を作成する（教材 2）。なお、各文法項目 6～7 場面程度のスライドを用意することとした。

文法の導入時にあたる 1, 3, 5, 7 時には、まず教材 1 を用いて文法の説明を行う。続いて教材 2 を用いて、スライドを 1 枚ずつ提示し、その場面を表す英文を生徒に考えさせる（新出文法に関わる練習問題）。その後、英文を口頭で言わせ、視覚的に正しい英文を確認させる活動を行う。

文法の復習時となる 2, 4, 6, 8, 9, 10 時には、教材 2 を用いて上記と同じ手順で生徒に英文を考えさせる機会をもつ。

### 【手立て 2：タブレットを活用した復習】

#### ① 目的

タブレットで配信された、難易度別の復習問題に各自で取り組ませることにより、新出文法の理解の定着を図る。

#### ② 内容

新出文法に関する復習問題を、難易度別に 3 種類用意し、それらをタブレットで配信する。生徒は、配信された 3 種類の中から、各自の理解度に応じて問題を選んで取り組む。

難易度は、以下の通りとし、各難易度 4～5 問を用意した。

高：英作文
「私は毎日早く起きなければならない」
中：穴埋め
I ( ) ( ) get up early every day.
低：選択式
I ( have to / can ) get up early every day.

### 【手立て 3：自己表現】

#### ① 目的

3-1：継続的に、自分に関することを一文で書かせ、実践者による添削を読ませることで、各自の学習の成果や課題を理解させる。

3-2：単元末にパフォーマンス課題に取り組みせ、既習知識を適切に活用しながら自分の考えをまとめた英文で書かせる。

#### ② 内容

3-1：教科書掲載の Practice の中から、自己表現に関わる問題に取り組みさせる。生徒には、思いつく限りの文を授業プリント書かせるようにする。授業後に回収した授業プリントに書かれた英文を実践者が添削し、次時に返却をする。

3-2：単元末の Unit Activity のテーマを活用し、海外から日本へやってくる留学生に、「日本」「自分の家庭」「学校」それぞれの習慣・ルール・マナーを知らせる英文を書かせる。

## 4 目指す生徒を育成するための研究構想図

各手立ての関係をまとめると図 1 のようになる。そして、図 1 の実践の成果により目指す生徒を育成することができると思われる。

## 5 検証方法

本実践研究の目標が達成されたかどうかについて、アンケート及び生徒の記述した英文を分析する。

### (1) 事後アンケート

研究目標 a) 及び b) を調査するため、事後に 5 件法による選択式アンケートと記述式アンケートを行った。選択式アンケートの項目は以下の通りであり、なぜ

その回答になったのかという理由を項目ごとに書かせた。これを記述式アンケートとして分析の対象とした。

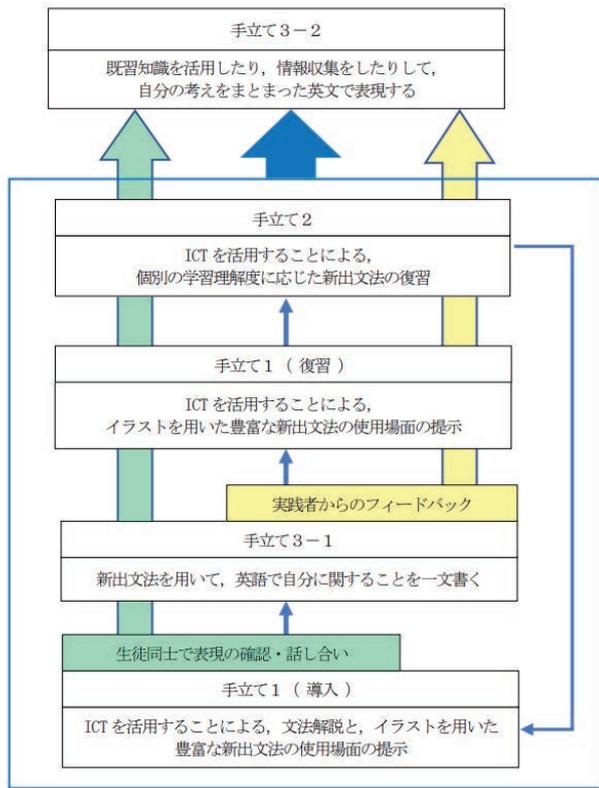


図1 研究構想図

1. 復習問題をタブレット（ロイロノート）を使って、自分でレベルを選択して取り組む活動は、よかったですか。
  2. 復習問題をタブレット（ロイロノート）を使って、自分でレベルを選択して取り組むことで、新しく学んだ文法の意味や使い方を覚えることにつながったと思いますか。
  3. 復習問題を、印刷されたプリントで取り組むよりも、タブレット（ロイロノート）を使って取り組む方がよかったですか。
  4. 授業内で取り組んだ復習問題に、自宅での学習や授業以外の時間にも取り組みましたか。
  5. 授業内で復習問題に取り組んだとき、5分間で問題を解き、3分間で丸付けと提出をしました。この時間設定は適切だったと思いますか。
  6. 授業内で取り組んだ復習問題に、期末テストの勉強をするときにも取り組みましたか。
  7. デジタル黒板や授業スライドを使って、新しく学ぶ文法の説明を聞いたり、練習問題を解いたりしたことは、新しく学ぶ文法を理解するために役に立ったと思いますか。
  8. 板書での授業よりも、デジタル黒板や授業スライドを使った授業の方が分かりやすいと思いますか。
  9. 授業内で使っていた授業スライドを、自宅での学習や授業以外の時間にも見ましたか。
- 5件法による回答  
 「5 非常にそう思う」「4 そう思う」  
 「3 どちらとも言えない」  
 「2 そう思わない」「1 全くそう思わない」

研究目標 a)における仮説a)に関しては項目7と8の回答に、仮説b)に関しては項目1, 2の回答にそれ

ぞれ注目をし、生徒の記述内容から理解できたかどうかを検討していく。

また、研究目標 b)に関しては全ての項目における生徒の回答を分析の対象とするが、特に項目3, 4, 5, 6, 9の回答に注目をし、ICT活用についての利点や課題を探っていく。

(2) 単元末のパフォーマンス課題における英文

生徒が、自分の考えを文法的な間違いを恐れずに表現することのできたかどうかを見取るために、単元末のUnit Activityにおけるパフォーマンス課題で書かれた英文を調査する。

調査の方法としては、新出文法の使用の適切さを、意味、形式、使用場面における使い分けの観点で数値化することで見取っていく。また、生徒が書きたいと考えた内容にもよるが、新出文法がどの程度使用されたかについても数値化して見取っていく。

なお、ここでは、手立て1で取り上げた英文については、分析の対象から除外する。これは、全員が正しく覚えるために使用された文であることから、これらの文を使用する際に「間違いを恐れず表現する」というよりも「記憶の再生」に過ぎないと思われるからである。

IV 実践内容と生徒の姿

1 参加者

(1) 実践校及び対象生徒

A市立B中学校2年C組(36名)

(2) 実践期間

2022年10月5日～2022年11月4日

(3) 実践単元

東京書籍 NEW HORIZON 2 Unit 4 Homestay in the United States

2 実践の内容

(1) 単元計画

順	教科書パート	内容
0	Unit Activity	Unit 3 Unit Activity
1	Unit 4	新出文法 (have to) の学習
2	Scene 1	新出文法 (have to) の復習 教科書本文
3	Unit 4	新出文法 (must) の学習
4	Scene 2	新出文法 (must) の復習 教科書本文
5	Unit 4	新出文法 (動名詞) の学習
6	Read and Think 1	新出文法 (動名詞) の復習 教科書本文
7	Unit 4	新出文法 (動名詞) の学習
8	Read and Think 2	新出文法 (動名詞) の復習 教科書本文
9	Unit 4 Scene 1～ Read and Think 2	Unit 4 の新出文法のまとめ
10	Unit Activity	Unit 4 のまとめ アメリカの習慣やマナー・ルールについての文章を読み、内容を捉える。

11	Unit Activity	身の回りのルールやマナーについて英語で表現する。
----	---------------	--------------------------

なお、この実践では帯活動として、毎時間授業の開始7分程度で単元の新出語彙の意味を生徒同士で口頭で確認をしたり、綴りを覚えるために授業ノートに単語を書いたりする活動を行った。

## (2) 授業の実際と生徒の姿

### 【Unit 3 Unit Activity】

#### 第0時

・Unit 3 Unit Activity  
夏休みや週末の休日の間にしたことやその感想についての、to不定詞を用いた自己表現活動（作文）

スラスラと書き始めることのできた生徒と、書き始めることができない生徒がいた。書き始めることができた生徒は、新出文法を用いて自己表現をすることができていた。

書き始めることができなかった生徒に対して、机間指導の中で「部活はなかったの」と問いかけた。「あった」と答えた生徒には、「部活をするために学校へ行ったと表現してみて」と声をかけた。以下が、その際の実践者と生徒のやり取りの例である。

T 「wentは何の過去形で意味は何？」  
S 「go, 行った」  
T 「自分はどこへ行ったの？」  
S 「学校」  
T 「学校は英語で何て言う？」  
S 「school」  
T 「I went toに続いて学校へ行ったと表してみて」  
S 「I went to school」  
T 「何するために学校へ行っったの」  
S 「部活をするため」  
T 「何部？」  
S 「サッカー部」  
T 「じゃあ、サッカーをするって英語で何て言う？」  
S 「play soccer」  
T 「toの後ろにサッカーをするっていう表現を当てはめて、サッカーをするためという表現を完成させて」  
S 「to play soccer」  
T 「どんな文章が完成した？」  
S 「I went to school to play soccer.」

生徒は、話す内容があれば、実践者の補助とワークシートに示されたヒントを基に、新出文法を用いて自己表現をすることができた者もいた。しかし、toのあとに動名詞を書いたり、名詞を続けたりする者もいた。

### 【Unit 4 Scene 1】

#### 【指導過程】

#### 第1時

・新出文法 have to の導入（手立て1）  
・新出文法の練習問題7問（手立て1）  
・教科書 Practice, 新出文法を用いた自己表現（手立て3）

#### 第2時

・新出文法の練習問題3問（手立て1）  
・タブレットを用いた難易度別の復習問題（手立て2）  
・教科書本文の、内容と表現の確認

#### 【手立てにおける生徒の様子】

第1時導入における手立て1の場面で、Teacher

Talkとして実践者の家のルールを新出文法 have to と don't have to を用いて表現した。その際に、電子黒板に Teacher Talk の内容を理解するためのイラストを表示したところ、生徒が実践者の Teacher Talk の内容を捉えることができていた様子を見せた。

次に、スライドを用いた新出文法に関する穴埋め式の練習問題を提示し（手立て1, 図2）、解答を考えさせる際に「Talk with your friends.」と声をかけると、生徒同士で確認し合っていた。解答をさせる際に、指名した生徒の解答はすべて正答であった。

**Let's practice with other examples!!**  
繰り返し練習して表現を定着させよう!

I [ **have to**  
**do not have to** ] go to juku today.

私は今日、塾に行かなければならない。  
私は今日、塾に行かなくてもよい。

月	火	水	木	金	土	日
塾		塾	習字		部活	

図2 スライド上で出題した練習問題の例

続く手立て3の場面で、教科書の Practice の問題を早く解き終わったり、新出文法の have to を用いた自己表現ができたりした生徒には挙手をさせ、実践者による点検を受けさせた。その点検で合格を得た生徒には、ミニティーチャーとして困っている生徒の学習を手助けしたり、丸をつけたりするようにした。10分程度の時間を設けたが、授業終了までにはほとんどの生徒が解き終えることができた。

第2時の手立て1による復習場面でも、解答を生徒同士で確認し合う姿が見られた。

手立て2の場面で、生徒たちは、初めてタブレットを用いて復習問題に取り組む活動をした。そのため、タブレットを開いて練習問題のページを見つけ、実際に練習問題に取り掛かるまでに時間を要してしまった。解答の際に、タブレットに文字を指で書いたり、タイピングによって入力したりしている生徒が多く見られた。「ノートに書いてもいいですか」と尋ねた生徒がいたため、ノートに書いてもよいということを伝えた。授業後に、生徒にレベル別の復習問題に取り組んだ感想を尋ねると、「単語が書けないから英作文をすることは難しいけど、選択式の問題があったから取り組みやすかった」という回答を得た。

### 【Unit 4 Scene 2】

#### 【指導過程】

#### 第3時

・新出文法 must の導入（手立て1）  
・新出文法の練習問題7問（手立て1）  
・新出文法を用いたインタビュー活動  
・教科書 Practice, 新出文法を用いた自己表現（手立て3）

#### 第4時

・新出文法の練習問題5問（手立て1）  
・タブレットを用いた難易度別の復習問題（手立て2）  
・教科書本文の、内容と表現の確認

### 【手立てにおける生徒の様子】

第3時導入における手立て1の場面で、新出文法 must と must not の導入として、様々な標識を電子黒板に提示しながら Teacher Talk を行った。日本では見慣れない標識を用いたため、生徒は興味を持って活動に取り組んでいた。新出文法である must not を示す前に標識の意味を尋ねたときには、禁止の命令を表す Don't を用いて表現した生徒がいた。

スライドを用いた新出文法に関する穴埋め式の練習問題に取り組む際、スライドを見てすぐに正しい答えを小声でつぶやく生徒が何人かいた。その後、“Talk with your friends.” と声をかけると、第1時よりも活発に解答の確認をし合っていた。

続く手立て3の場面では、must と must not を用いて学校のルールについて英文で表現をさせた。その際、生徒は直前に行った、学校のルールについての尋ね合うインタビュー活動でやりとりした内容を思い出しながら自己表現をすることができていた。授業後に実践者が回収して添削をしたところ、ほとんどの生徒が正しい文を書いていた。must の直後に動名詞を書いた生徒や、主語と目的語における代名詞の人称がずれていた生徒については、間違っている箇所に下線を引き、次時まで返却をした。

第4時の手立て1による復習では、must を用いて表現する問題だけではなく、don't have to を用いて表現すべき問題も取り入れた。生徒の中には、don't have to を用いて表現すべき問題に must not を用いて答えていた者もいたため、否定形の意味の違いを改めて確認させた。

続く第4時の手立て2の場面でも、復習問題に取り組む準備をする際、ロイロノートに収録されている問題を見つけることができず、戸惑っている生徒がいた。中には、Scene 2 の問題ではなく、間違えて Scene 1 や Read and Think 1 の問題に取り組んでいる生徒もおり、実践者が机間指導をすることによって問題を確認する必要があった。また、答え合わせをする際には、ロイロノートで2つのページを行き来しながら答え合わせをしており、「答え合わせしにくい」という声も聞こえた。

生徒がタブレット上に提出した復習問題を確認したところ、多くの生徒が一番簡単な難易度の問題に取り組んでいた。その中には、実践者が見て中難易度の問題に取り組む方がよいと思われる生徒もおり、生徒の理解度に応じて難易度を選択させるための声掛けが必要だと分かった。

### 【Unit 4 Read and Think 1】

#### 【指導過程】

##### 第5時

- ・ have to と must の復習 (手立て1)
- ・ 新出文法 (動名詞) の導入 (手立て1)

- ・ 新出文法の練習問題7問 (手立て1)
- ・ 教科書 Practice, 新出文法を用いた自己表現 (手立て3)

##### 第6時

- ・ 新出文法の練習問題4問 (手立て1)
- ・ タブレットを用いた難易度別の復習問題 (手立て2)
- ・ 教科書本文の、内容と表現の確認

### 【手立てにおける生徒の様子】

第5時導入における手立て1で、have to と must の復習を行った。それまでの授業で用いた練習問題を提示し、生徒に取り組ませたところ、生徒は文法を正しく用いて解答することができていた。

次に、新出文法である動名詞の導入として、start と finish を用いて Teacher Talk をした。電子黒板にイラストを提示しながら行ったため、生徒は Teacher Talk の内容を捉えることができていた。

スライドを用いた新出文法に関する穴埋め式の練習問題に取り組む活動では、第3時と同様に、生徒はスライドを見てすぐに正しい答えを言っていた。その後の場面でも、活発に解答の確認をし合っていた。

続く手立て3の場面で、自己表現に取り組む際に、“I enjoyed playing soccer.” と書いた生徒がいた。さらに、文法を学ぶための基本文が“I finished using bathroom.”であったため、“I enjoyed using soccer.”と、意味を踏まえることなく using をそのまま使っている生徒もいた。“enjoy + ~ing”=(~することを楽しむ)というように1セットとして説明したほうがよいことが分かった。

そこで、第6時における動名詞の復習では、“enjoy + ~ing”ばかりではなく、finish, start, stop についても、形式の確認をした。すると生徒は形式と意味を結び付けて理解できたようであった。

手立て2の場面では、生徒が問題を見つけやすくなるように、ロイロノートの「送る」機能を用いてその場で問題を配布した。生徒は容易に問題を見つけ、復習に取り組むことができていた。しかし、答え合わせのしやすさについては、まだ改善しきることができなかったため、生徒は自分のタブレット上でページを行き来しながら答え合わせをする必要があった。

タブレット上で提出された復習問題を確認したところ、前回よりも中難易度に取り組んだ生徒が増えていた。中には、中難易度の問題に取り組んではいるが、新出文法の理解が不十分であると思われる生徒もいたため、一番簡単な問題に取り組むことで新出文法を理解することができるようコメントを書いて返却をした。

### 【Unit 4 Read and Think 2】

#### 【指導過程】

##### 第7時

- ・ 新出文法 (主語としての動名詞) の導入 (手立て1)
- ・ 新出文法の練習問題6問 (手立て1)
- ・ 教科書 Practice, 新出文法を用いた自己表現 (手立て3)

##### 第8時

- ・ 新出文法の練習問題4問 (手立て1)

- ・タブレットを用いた難易度別の復習問題（手立て2）
- ・教科書本文の、内容と表現の確認

### 【手立てにおける生徒の様子】

第7時の導入については、いつも通り Teacher Talk を行った。生徒はこれまでと同様、理解しようとする姿勢で耳を傾けていた。

スライドを用いた新出文法に関する練習問題では、動詞の単数形に注意をさせるために is と are を選択肢に入れた問題を提示した。戸惑う生徒も見られたが、生徒同士で解答を確認し合うことで is が正しいという理解が広まった。

手立て3の場面では、特に戸惑うことなく活動に取り組む生徒の姿を見ることができた。動名詞が主語になる文でも、is を正しく用いて表現することができていた。

第8時手立て1による新出文法の復習では、再度 is と are を選択肢に入れた問題を提示した。何枚もスライドで練習問題に取り組み、動詞の形にも注目させてきたため、生徒は is を用いて問題に解答することができていた。

手立て2の場面で、生徒は、タブレットを用いて復習問題に取り組むことに慣れてきた様子を見せていた。問題への取り組みについても、実践者がこれまで「レベルアップに挑戦しよう」とコメントをしてきたため、レベルを上げて取り組むようになった生徒がいた。

## 【Unit 4 Unit Activity】

### 【指導過程】

#### 第9時

- ・動名詞の復習（手立て1）

#### 第10時

- ・have to と must の復習（手立て1）
- ・Unit Activity（手立て3）

- STEP 1：アメリカの習慣やマナー・ルールについての英文を読み、内容を理解する。  
 STEP 2：日本の習慣やマナーについて挙げ、表現をする。  
 STEP 3：自分の家のルールについて挙げ、表現をする。  
 STEP 4：学校の校則について挙げ、表現をする。  
 STEP 5：STEP 1～4の記述をまとめる。

（第10時はSTEP 2まで）

#### 第11時

- ・have to と must の表現の復習
- ・Unit Activity（手立て3、STEP 3から）

### 【手立てにおける生徒の様子】

第9・10時の手立て1の場面では、Unit 4で学んだ文法の復習をする際に、これまでの授業で用いたスライドを再利用した。そのため、生徒たちも戸惑うことなく文法を復習することができていた。

Unit Activity（手立て3）では、図4のプリントに沿って活動をさせた。STEP 1でアメリカのルールを確認したことから、STEP 2以降の自分たちに関わるルールを対比して考えようとする生徒がいた。STEP 2から4までは、まず日本語でルールをメモ書きさせ、その後英語で表現させた。第10時にルールが思い浮かば

ない生徒がいたため、第11時に「おたすけプリント」を配付した。そのプリントによりイメージをふくらませることができた生徒もいたが、プリントの表現を使って文章を書き加えている生徒も見られた。

## V 結果と考察

### 1 アンケート分析

#### （1）実践後のアンケートの結果

本実践研究の目標である「a) 中学校英語科における、『自分の考えを文法的な間違いを恐れずに表現することのできる生徒』を育成するための、ICTを活用した授業の有効性」及び「b) ICTの授業内外における活用について、その利点と課題を生徒の意見から見出す」ために、実践後に選択式及び記述式のアンケートを採った。本実践研究では、対象生徒36名の中から、事後アンケートに回答をした30名と分析の対象とした。選択式アンケートの結果は表1の通りとなった。

表1 事後における選択式アンケート結果（n=30）

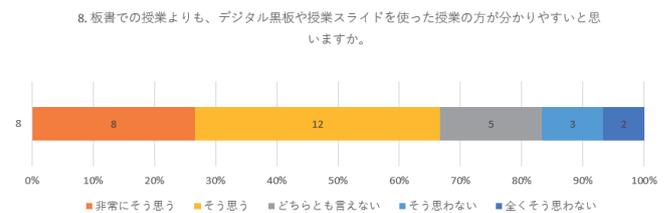
項目	平均	標準偏差	最大値	最小値
1	3.93	0.772	5	2
2	3.77	0.844	5	1
3	3.47	1.204	5	1
4	2.17	1.344	5	1
5	3.37	1.197	5	1
6	2.43	1.453	5	1
7	4.00	0.894	5	2
8	3.70	1.159	5	1
9	1.97	1.354	5	1

#### （2）研究目標 a) に関する分析と考察

#### 【研究仮説7) に関して】

研究仮説7)の検証については、アンケート項目7と8における回答に注目をする。なお、授業における指導順序に合わせて、項目8から考察を行う。

#### 【項目8のアンケート結果】



#### 図3 項目8におけるアンケートの結果

約67%の生徒が、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。約17%の生徒が、「そう思わない」「全くそう思わない」と回答した。

成果としては、以下の点があると考えられる。

「板書の授業だとノートを書くことに集中して授業内容をあまり理解できないから」という生徒の記述があった。これまでの授業では、文法説明に関する板書事項をすべてノートに書き写させていた。今回の授業実践ではプレゼンテーションスライドを用いた文法説明がされたため、生徒は説明の全てをノートに書き写すことはできず、集中して説明を聞くこととなった。

また、「先生が書く時間がないのでスムーズに進む」という生徒の記述があった。これは、板書をすることで発生する説明の中断がなくなり、流れるように説明が行われることを意味していると思われる。この点も、生徒が新出文法が分かりやすくなったと捉えた原因の一つであると考えられる。

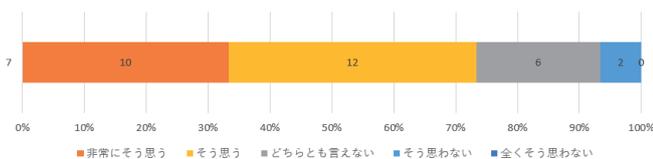
そして、板書に費やす時間が削減されるよって、新出文法の理解を深めるための練習問題に、より多くの時間取り組むができるようになった。この点も、生徒の理解につながったのではないかと考える。

さらに、「デジタルだと自分で授業と同じように復習ができるので、学習に便利だと思う」という生徒の記述があった。授業で使用したスライドは、タブレットを通して生徒全員が使用できるようになっていた。そのスライドを授業外での学習にも活用することで、学習内容をより理解することにつながったのではないかと考える。

一方で、「スライドの切り替えが速い」「モニターが反射して見づらい」という意見を書いた生徒もいた。生徒の様子を見ながらスライドの見せ方を変えていく等、授業の進行について考慮することがあることが分かった。また、「板書のほうがノートに書くため、記憶に残りやすい」と記述した生徒もいた。こういった生徒は、これまでの授業経験の中で、文法規則を書いて覚えることが習慣化されていると思われる。規則を、練習問題を通して身に付けていくという学びになれていってもらいたいと考える。

#### 【項目7のアンケート結果】

7. デジタル黒板や授業スライドを使って、新しく学ぶ文法の説明を聞いたり、練習問題を解いたりしたことは、新しく学ぶ文法を理解するために役に立ったと思いますか。



#### 図4 項目7におけるアンケートの結果

約73%の生徒が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。また、「そう思わない」生徒が6.7%であり、「全くそう思わない」は0%であった。

授業の中で、新出文法を用いた英文を完成させる練習問題に取り組んだ際、生徒は問題数を重ねるごとに、より早く解答することができるようになっていた。実際に、生徒の記述式アンケートには、「問題を解きながらやるのがとてもいいと思った」「文法を繰り返し復習してとても身についた」という意見が見られた。ここから、練習問題を、スライドを通して反復して行うことで、生徒が新出文法を視覚的に記憶し、規則の理解を深めていくことができたのではないかと考える。

一方で、スライドで出題した練習問題は、基礎基本を理解することができるようにするために簡単な問題

にすることを心掛けた。そのため、「同じような問題ばかりだったので問題のバリエーションが欲しい」という意見もあり、英語の学習が得意な生徒にとってはつまらないと感じる活動になっていたようであった。主語や時制による表現の変化についてもより多く取り入れる等、問題を工夫する必要があると思われる。

#### 【研究仮説7)に関するまとめ】

新出文法が用いられる場面をイラストで示し、その内容を英文で考えさせることは、新出文法の意味、形式、使用場面を理解させることに対して、一定の成果があったと考えられる。

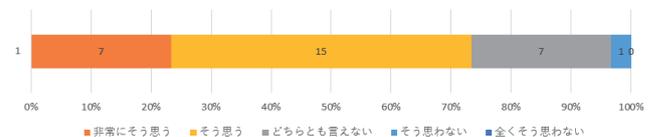
一方で、スライドの内容や見せ方には課題があったように思われる。モニターを設置する場所はもちろんのこと、生徒の実態に応じて、丁寧にゆっくり説明をしたり、様々な言語使用場面をイラストで用意したりする等の工夫が必要であろう。

#### 【研究仮説4)に関して】

研究仮説4)の検証については、アンケート項目1, 2, 3における回答に注目をする。

#### 【項目1のアンケート結果】

1. 復習問題をタブレット(ロイロノート)を使って、自分でレベルを選択して取り組む活動は、よかったですか。



#### 図5 設問1におけるアンケートの結果

約73%の生徒が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。また、「そう思わない」生徒が3.3%であり、「全くそう思わない」は0%であった。

生徒からは、「分かる問題を解くとやる気が出るから」「少しでも解ける問題が増えたから」「解けたときにうれしい」という意見がアンケートから得られた。学習を苦手に行っている生徒たちの記述にも、複数用意された難易度別の問題から自由に選択して解答することは、生徒に「解ける」という喜びをもたらし、取り組もうとする意欲を高めることにつながった様子が見られた。

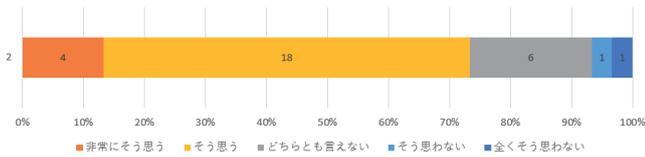
また、「より高いレベルで自分の力になることができたから」という意見もあった。英語の学習が得意な生徒にとっては知識を活用する機会となり、新出文法の理解を深めることができたようであった。

一方で、高い難易度に挑戦した生徒からは、「時間内に問題を解き終わることができない」という意見を得ており、手立て2により無力感を感じさせてしまったのではないかと考えられた。難易度別に問題が用意されている意味をよりしっかりと生徒に理解させる必要も

あるが、時間設定にゆとりをもたせたり、より易しい問題を選択させたりすることによって、生徒が安心して問題に取り組むことができるようにする必要がある。

### 【項目2のアンケート結果】

2. 復習問題をタブレット（ロイノート）を使って、自分でレベルを選択して取り組むことで、新しく学んだ文法の意味や使い方を覚えることにつながったと思いますか。



### 図6 設問2におけるアンケートの結果

約73%の生徒が、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。また、「そう思わない」「全くそう思わない」は6.7%であった。

「覚えたことを使って練習することで、知識を定着させることができたと思った」という生徒による記述があったが、自分の理解に応じた難易度の問題に取り組んだため、解答するとき覚えた知識を使うことができた様子が伺える。

「いろいろな種類の問題を解くことで、使い方を分かることができる」「理解があいまいなところもよくわかるようになった」という生徒の記述があったが、これらの生徒は複数の難易度の問題に取り組み、新出文法に関して基本的な点から理解を進めていったようである。

否定的な回答をした生徒は「タブレットで問題を解くよりもノートに書いて解いた方が覚えられるから」という意見や、学習自体を苦手としていることをうかがわせることを書いていた。これらの回答は、難易度別の問題に取り組むことが新出文法の理解につながるかどうかという視点とは異なる内容であると思われるが、多様な問題を用意し、それぞれの生徒が自分に合った復習を行うことができるようにすることによって、学習内容をより定着させやすくする工夫も必要であると考える。

### 【研究仮説f)に関するまとめ】

生徒の理解度に応じて、復習問題を難易度別に提示することが、新出文法の意味、形式、使用場面を理解させることに対して、一定の成果があったと考えられる。また、難易度別に復習問題を示すことは、新出文法を理解させるばかりではなく、どの学力の生徒に対しても、学習に対する意欲を高めることがあらためて明らかになったと考える。

一方で、問題を選択する際の指導が重要であることが分かった。生徒の中には、自分の理解度よりも高い難易度の問題を選択してしまう者もいた。こういった生徒が、学力が足りないことに対して自信をなくしてしまわないように配慮しなければならないだろう。

### (3) 研究目標b)に関する考察

実践後の記述式アンケートにおける生徒の記述から、ICT活用の利点と課題を考察する。

まず、ICT活用の利点としては「復習に活用することができる」という点が挙げられる。項目3における生徒の記述に、「問題を何回も解き直すことができる」というものがあった。タブレットには、問題用紙が保存されているため、何度もそれを読み込み、問題を解き直すことができる。そうすることによって、より新出文法の理解を深めていくことができるといった生徒の考えを知ることができた。

さらに、「授業外での学習に役立つ」ということが利点として挙げられる。授業外での学習に関する考えを尋ねた項目4、6、9では、授業の復習をする際に、タブレットを使って授業で用いた教材を見直したり、問題を解き直したりしたという生徒の記述が見られた。また、授業を欠席した生徒が、授業内容を知るために授業スライドを活用したという記述もあり、ICTを活用することで生徒の学習を保障することができたのではないかと考える。

ICT活用の課題としては、生徒の操作技術や学習方法の多様性が挙げられる。項目5では、授業内において生徒が復習問題に取り掛かるための準備に時間を要したため、問題を解く時間が十分になかったという記述があった。また、実践校ではタブレットの使用に時間帯の制限が設けられており、全ての教材をタブレットで配信すると、使用制限がされた時間帯では学習ができないという事態が発生することもあった。また、従来の学習方法である、プリントに書いて学習することを好む生徒も少なくない。教材の準備については、ICT活用とプリントの併用をしていくことが、生徒に合った学習のために望ましいと考える。

## 2 単元末のパフォーマンス課題における英文の分析

Unit Activityにおける自己表現活動において、生徒は今単元で学んだ have to や must を用いて習慣やマナー、ルールについて表現した。生徒が書いた英文の適切さや新出言語材料の使用回数を表2に示す。

表2 パフォーマンス課題における言語使用の結果 (n=30)

新出言語材料	適切さ (%)			一人当たりの使用回数		
	意味	形式	使い分け	使用回数/人数	最大	最小
have to	95.7	95.7	68.6	2.33	9	0
must	100	95.0	25.0	0.67	2	0
don't have to	73.7	94.7	-	0.63	3	0
must not	98.1	83.3	-	1.83	4	0

have to を用いた文は合計で70文であった。また、意味を正しく捉えて書かれた文では、全て have to が文法的に正しく用いられていた。70文中3つの文章で「～してはいけない」という意味で誤って have to を

用いて表現されていた。

must を用いた文は合計で 20 文あり、全ての文章で must の意味を正しく捉えて表現されていた。形式の間違いは must の綴りの間違いであり、must + 動詞の原形については適切に使用されていた。

don't have to を用いた文は合計で 19 文であった。19 文中 4 文で「～してもよい」という意味による誤使用であった。授業で英文 “We don't have to go to school on Sundays.”（「日曜日に学校へ行かなくてもよい」）を提示した際、「行かなくてもいいなら、行ってもいいんじゃない？」と言った生徒がいた。授業者は注意したものの、このまま意味を捉えてしまったのではないかと推測する。

must not を用いた文は合計で 54 文であった。must not の短縮形である mustn't を musn't と書き誤っている文章が 4 文あった。これは、発音が /mʌ'snt/ であるため、t が抜けてしまったのではないかと推測する。授業実践中には、発音を繰り返し確認することはあったが、綴りを取り上げて確認することはなかったため、綴りを誤ってしまっていたのだと考える。

使用される新出文法には偏りが見られた。最も多かった表現は have to であり、must not がそれに続いた。「必要性」「義務」「禁止」は、ルールとして表現しやすいためであると思われる。不必要や義務の否定を示す don't have to は、生徒の生活の中では使用される機会が少ないのではないかと考えられる。

これらの結果から、生徒は新出文法を用いて、自分の考えを表現することができたのではないかと考える。間違いを恐れずという点については生徒の考えを見取ることができなかったが、実際には意味や形式に間違いが見られるものの、自分の考えを伝えようとする姿を見ることができた。

一方で、have to と must の使い分けについては、授業の中で詳しく指導することはなかった。そのため、have to を用いた文のうち約 31.4%、must を用いた文のうち約 75% の文で誤った使い分けがされていた。どちらを使用するか悩んだ生徒が have to を使用した様子が、その使用回数に表れていると思われる。

## VI 本実践研究のまとめ

本実践研究では、中学校英語科において、自分の考えを文法的な間違いを恐れずに表現することのできる生徒の育成を目指し、ICT を活用した授業の中で、新出文法に関する知識習得や継続的な練習問題への取り組みによる実践を行った。

本実践研究の成果と課題を以下に示す。

### 【成果】

- ・スライドを用いて、新出文法の学習や反復練習を行うことで、生徒は新出文法の意味、形式を理解することができた。
- ・タブレットを活用して、自分の理解度に応じて新出文法の復習をすることで、生徒は新出文法の理解を深めたり、学習に対する意欲を高めたりすることができた。

- ・新出文法に関する練習問題を何度も行った後に自己表現をすることで、多くの生徒が新出文法を用いて、自分の考えを伝えようとしていた。

### 【課題】

- ・スライドを用いて、新出文法の学習や反復練習をする際には、多種多様な問題を用意することによって、生徒の関心を高める必要がある。
- ・タブレットを用いた復習問題については、タブレットの操作によって学習が妨げられないようにするために、問題の提示や取り組み方に工夫が必要である。
- ・意味の似通った表現の使い分けについても指導することによって、生徒が自己表現をする際に、細かな意味の違いを意識しながらより適切な表現をすることができるようにする必要がある。

また、本授業実践では、自己表現の際に単文を用いさせることが多かったが、文と文のつながりを意識させながら物事を詳しく述べるができるように、接続詞などを含めたまとまりのある文章による自己表現をさせる必要があると考える。

今後は、ICT を活用し、語彙知識を身に付けさせる教材も工夫していきたい。そして、学んだ語彙や文法を使って、自分の考えをまとまりのある文章で表現させる活動を取り入れていくことによって、現代の社会で求められている、英語によるコミュニケーション能力を身に付けさせるような授業開発・実践を目指していきたい。

## 引用・参考文献

- ・長谷川修治・安藤則夫 (2017) 「デジタル英語教材を使用した個別学習の習熟度別効果— 小学校 5 年生のリスニング力と情意面について —」『植草学園大学研究紀要』第 9 巻 41-50.
- ・松尾 晃佑 (2018) 「伝える力」を育成する授業の一考察：中学校英語科での実践を通して」『京都教育大学大学院連合教職実践研究科授業力高度化コース修了論文;平成 30 年度』
- ・文部科学省 (2014a) 「平成 26 年度小学校外国語活動実施状況調査の結果 [概要]」[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2015/09/24/1362168\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf) (最終閲覧日 2023 年 2 月 9 日)
- ・文部科学省 (2014b) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm) (最終閲覧日 2023 年 2 月 9 日)
- ・文部科学省 (2016) 「教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チーム (第 3 回) 配付資料、資料 5 言語能力について (整理メモ)」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryoo/attach/1366049.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryoo/attach/1366049.htm) (最終閲覧日 2023 年 2 月 9 日)
- ・文部科学省 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して (答申) 【概要】、[https://www.mext.go.jp/content/20210126\\_mxt\\_syoto02-000012321\\_1-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126_mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf) (最終閲覧日 2023 年 2 月 9 日)
- ・中島真吾 (2012) 「自己表現活動を取り入れた中学 2 年生の授業」『中部地区英語教育学会紀要』41 巻, 177-182.
- ・山口県美祢市教育委員会 (2022) 「美祢市の Qubena 活用について」<https://drive.google.com/file/d/1CRel0oNttPGRf4b7TIGAFllMofnF2NZz/view> (最終閲覧日 2023 年 2 月 9 日)
- ・財団法人日本視聴覚教育協会 (2012) 「平成 23 年度文部科学省委託 国内の ICT の教育活用好事例の収集・普及・促進に関する調査研究事業 「教育 ICT 活用実践事例集」」<http://eduict.javea.or.jp/jireishu.html> (最終閲覧日 2023 年 2 月 9 日)